

## 高大連携講座「現代のヨーロッパをどの様に学ぶか2」

記録 世界史推進委員会

昨年度(2020年)は、中止せざるを得なかったが、今年度(2021年)は会場での対面の授業と、オンラインを組み合わせるハイブリッドの形で行うことができた。多くの方はご存じかと思うが、この神奈川県歴史分科会で行っている高大連携講座は、全日程通してのテーマ(今年度は現代のヨーロッパ)を、各日ごとに地域を変えて(今年度はドイツ、東欧、北欧)、高校教員と大学教員が各日1名ずつ高校生相手に授業を行うというものである。今年度は、会場での開催は可能だが人数を制限した方がよいという状況で、生徒とスタッフは会場、先生方にはオンラインでの参加をお願いした。ただしオンラインで参加する生徒もいたり、事前の申し込みを行ったり(現在では当たり前となっているが)、様々なことへの対応に迫られた。よって、授業者、参加者の方々には多大な迷惑をかけたと思われる。申し訳ございませんでした。

しかしながら、以下の各日の高校教員による報告を読んでいただければわかるが、全日程とも、充実した授業であった。さらに、対面とオンラインの生徒がいるなれない状況であるにもかかわらず、生徒に思考すること、対話することを求めるような挑戦的な授業が行われた。現状を喜ぶことはできないが、時代が変わりつつあることを実感する3日間であった。ぜひ読んでほしい。(県立湘南高校 中山拓憲)

### 1日目 8月10日(火)「現代のドイツ」

#### はじめに

「現代のヨーロッパをどのように学ぶか2」という題で実施された今回の高大連携講座では、3日間の共通テーマとして「後期近代(late modernity)」という概念が提示された。打ち合わせのメールのやり取りの中で、いくつかの参考文献が紹介されるだけでなく、講師の間では「後期近代とは何か」、「現代ヨーロッパ史における高大間の溝」といった建設的な問いが提示されていた。私(上野)自身も、授業の打ち合わせ段階で小野寺先生から授業に用いる史料を提供いただくなど、高大連携の価値を改めて感じる機会となった。

#### 高等学校教員による授業

授業内容としては、1950～60年代における西ドイツの経済復興から高度成長期(いわゆる「経済の奇跡」)を取り上げた。中学校までの単純化された東西冷戦のイメージを土台にしつつ、アメリカの対ドイツ政策の転換を学び、経済情勢が国際政治・国内政策に与える影響(今回は西ドイツにおける移民問題)を生徒に考えてもらうことを狙いとした。同時に、小野寺先生の授業への接続を試みるべく、西ドイツの<sup>ガストアルバイター</sup>外国人労働者問題を考える史料(トルコ系のルーツを持ったドイツのミュージシャン<sup>ジェム カラジャ</sup>Cem Karacaの「Es Kamen Menschen An “呼ばれたのは労働者だったが、やってきたのは人間だった”」という歌の詞)を授業の最初に取り上げた。なおこの史料は事前の打ち合わせにおいて、“後期近代を概観できるような、あるいは現代的な諸課題として認識できるような史料がないか”と相談したところ、小野寺先生からご提供いただいたものである。

コロナ禍における対話的な授業が模索される中で、今回の授業ではアプリ「<sup>パドレット</sup>padlet」を用いて生徒の意

見や発言を集約することを試みた。おそらく生徒が初めて使用するアプリではあったものの、文字によるコミュニケーションはGoogleの「Jamboard」よりも優れていたように思われる。一方で、授業における導入として提示した「現代のドイツと聞くと、あなたはどんなことを考えましたか？」という問いに対しては、「ビール」「サッカー」「まじめそう」といった回答が多く、「現代の」という点に注目させられなかったのは反省点である。「(ドイツは)何か我々と通じるものがある」というコメントが生徒からあったように、ドイツと日本の戦後を学ぶと多くの類似性が浮かび上がる。歴史総合の授業で実践するうえで、現代日本に生きる私たちが直面する労働問題(技能実習生、非正規雇用)などに関連させながら、グローバル化による諸問題を考えさせることができるであろう。

### 大学教員による授業

小野寺先生は“「後期近代」という時代のはじまり—1950年代から70年代前半の西ドイツ社会”と題した授業で、「1968」や1970年代を画期として、社会の質が大きく転換したという主旨で授業をされた。3日間の初日とのことで、まずは現代史の転換点にどのような変化が生じたのかという総論を提示し、その後はアデナウアー時代の西ドイツを詳しくみていき、最後に「1968年」を通して現代史を捉えなおすという展開であった。

今回のテーマであった「後期近代」を、小野寺先生の授業をもとに図示すると以下のようになる。

前期近代	→	後期近代
ものづくり中心の工業社会		サービス業(第三次産業)中心の社会
「量」を重視する社会 (大量消費社会)		生活の「質」を重視する社会 (ポスト物質主義的価値観)
—		声を上げるようになったマイノリティ
(ドイツでは) 宰相民主主義		人々の政治参加を求める動き
福祉国家体制の拡充 (しかしその後、行き詰まる)		新自由主義の台頭 世界的な格差の拡大
—		移民の統合が社会問題化

以上のように捉えると、我々の生きている現在の起源が「後期近代」にあることが明らかになる。日本の選挙においても環境問題やマイノリティの立場が重要な争点となっており、「後期近代」の視座から現代史を捉えなおすことは高校世界史においても今後重要視されていくアプローチであろう。

その後は、戦後西ドイツの出発点から講義が展開する。戦争で荒廃したドイツであったが、人々から反ユダヤ主義やスラヴ系の人々への憎悪がなかなか拭えず、さらに「戦争さえしなければ、ヒトラーは歴史上もっとも偉大な政治家の一人だった」というようにヒトラーのカリスマ性も遺された状態であったという。そうした状態で現れたアデナウアーが重視したのが、西ドイツの地位回復であった。1952年のECSC(ヨーロッパ石炭鉄鋼共同体)設立の背景を西ドイツの状況から語る切り口は、大変明快でわかりやすいものであった。この点において、ヨーロッパ経済・軍事に「埋め込まれた西ドイツ」と対照的なのが日本や東アジアの状況(地域連携の未成立)だと小野寺先生は指摘する。「経済の奇跡」といわれる高度成長を実現するアデナウアー時代であるが、その前提となったのは、東ドイツからの熟練労働者の流入や、安価な労働力としての外国人労働者であった。しかし国民経済が「豊かに」なっていった先にあったのが

「1968」である。ベトナム戦争への反発、アメリカでの黒人差別、「プラハの春」の弾圧といった現象が同時発生するなかで、若者を中心に多くの人々が反権威主義を唱え、伝統的価値規範や社会規範の打破を求めたのである。

おわりに、西ドイツにおいては、「お任せ民主主義」と決別し、参加型民主主義を求める時代への転換がはかられたこと、日本では3.11以降によりやうく社会的変化を求める動きが活発化する点、そして未だ残されている「格差」と新自由主義の問題を紹介し、講義を終えられた。

## 研究協議

午後は会場にいる教員と、オンラインで参加された方々とでハイブリッドな協議が行われた。事前の打ち合わせでも挙げられた「高校教員と大学教員の溝」についての議論が印象に残っている。この溝を高大が連携して埋めることで従来にはないヨーロッパ現代史の教育が可能になるだろうという話が出ていた。従来の高校世界史における現代史の中心は政治史であるが、今回の「後期近代」のように社会学の知見を取り入れ、日常生活や地球規模の課題からアプローチする現代史があってもよいのかもしれないと再考する機会となった。

[高校：上野信治（県立相原高校），大学：小野寺拓也（東京外国語大学）報告執筆者：上野]

## 2日目：8月11日「現代の中・東欧」

### はじめに 本授業の趣旨と目的

今回の授業を実施するにあたって、授業を行う高大教員間で事前に意見交換を行った。その結果、3日間の共通テーマは「新たな時代の区切り目として1968年を捉えてみる」と定まった。そのため、2日目の報告においては、「現代の中・東欧」を主題とし、「そもそも中・東欧とはどのような地域なのか」についてなど、高校生にとって馴染みが薄い地域である中・東欧に関する基礎事項を教授していきながら、「中・東欧における1968年とはどんな転機となったのか」を考えさせることを目的とすることになった。

授業展開においては、高校教員側がこの分野について未履修の生徒がいることを想定して「従来の（教科書的な）地域区分・時代区分」に基づいた授業を展開し、まず基礎事項を教授した。授業メソッドについては、3日間の高校教員側のバランスを考えて、こちらも「従来の講義型」の授業スタイルを選択した。一方で、大学教員側の授業においては、1968年を時代の画期とする新たな時代区分や地域区分を紹介し、より発展的な内容で授業を展開することとした。

### 高校教員による授業

サブタイトルを「共産主義国家が崩壊していった原因は何なのか」とし、定説的な枠組みで授業を行った。まずは、「東欧」という地域概念、「冷戦」という時代区分について概説し、生徒たちにイメージを持たせた。そのうえで、東欧諸国のうち、「ソ連」「チェコスロヴァキア」「ポーランド」「ハンガリー」を取り挙げながら、時代を「冷戦の開始（1945年～1950年半ば）」「雪解け（1950年代半ば～1960年代前半）」「再緊張（1960年代前半～1960年代半ば）」「デタント（1960年代半ば～1970年代後半）」「新冷戦（1970年代後半～1980年代半ば）」「冷戦の終結（1980年代半ば～1990年代前半）」に区分して授業で順番に紹介した。加えて、近日中に開始される「歴史総合」の授業を見越して、各時代においては代表的な資料（文献資料・画像資料）を紹介することに努めた。

そして最後に、大学教員による授業への接続として中澤氏などが提唱する「中・東欧」の地域概念を紹介し、1968年を区切りとして始まる「後期近代」という時代概念についても簡単に言及した。

### 大学教員による授業

「新自由主義への道程」とサブタイトルとしながら、主にスロヴァキア（チェコスロヴァキア）の事例を取り挙げながら授業を展開した。はじめに、「東欧」「中・東欧」「中欧」「東中欧」といった様々な地域概念の存在を紹介し、高校の教科書レベルを超えて、地域概念には見方によって多くの事例が存在することを意識させた。また、従来の時代区分に基づいた分水嶺としての「1989年」を紹介しつつ、最新の研究成果の代表例を紹介しながら、その前段階として、ポスト産業社会の始まりとなる「1968年以降」に時代の画期を意識することの重要性を認識させた。そして、「後期近代」以降の現代世界の質的転換を以下の4点に整理した。

- ・グローバル資本主義（「国際経済＝国民経済の総和」という把握からの脱却）
- ・冷戦体制解体後（「世界戦争の時代の終焉」）
- ・産業資本主義から知識資本主義への転換
- ・現代社会の構成員は生産者よりも消費者として機能

そのことが分かる具体例としてまず、今回は「プラハの春」を取り挙げた。そして、ここで活躍したドゥプチェクが提唱した「人間の顔をした社会主義」が、世界経済に合致する形を模索するための新しい社会主義モデルであり、本来的には民族対立やソ連型社会主義の否定を意味するものではなかったし、後のゴルバチョフのペレストロイカを先取りするものであったという新しい視点を生徒たちに紹介した。続いて、従来の画期とされた「モスクワの春（ペレストロイカ）」についても簡単に言及し、これらの諸改革が、資本主義陣営で起こった新自由主義やマイクロエレクトロニクス革命を反映した完全市場経済化を目指したものであったことと定義づけた。

まとめとして、政治的民主化を主張した面ばかりが強調される「プラハの春」について「経済活動の自由化」を主張した面が軽視されているのではないかと、また知識資本主義に基づく資本主義のグローバル化に対応するための「プロジェクト」として新自由主義は存在意義を有していたのではないかなど、歴史学の最先端に行く提案を含めた、非常に刺激的で示唆的な授業が行われた。

### 研究討議

午後の研究討議では、全国から参加した高校教員と大学教員により活発な意見交換が行われた。その中で特に話題となったのは、やはり「新自由主義」についてであった。討議の中では、「資本至上主義」「構成的至上主義」「社会民主主義」といった、3種類の「新自由主義」が存在するというのではないかという意見が出された。しかし、新自由主義を「型」として捉えすぎてしまうと「実際に住んでいる人たちの実態」が分からなくなってしまうのではないかと、という疑義も挟まれた。また、新自由主義には「万能」というイメージもあったが、その中で「社会主義」はどのような位置づけ（存在意義）があるのか、といった質問があったことも印象的であった。

また研究討議の中では、以下のような多くの新たな知見もあった。

- ・ユーゴスラヴィアでも経済改革を行おうとしていたが、政治家が民族主義を煽ったため民族対立に発展してしまったこと。

- ・ハンガリーのポピュリスト (オルバーン) は、「EUがダメなら中国に頼る」と民衆を煽っていること。
- ・ドゥプチェクはチェコでもスロヴァキアでも高い支持があり、学生運動はドゥプチェクを支持する人々が起こしたものであること。

[高校：上野信治 (県立相原高校)，大学：小野寺拓也 (東京外国語大学) 報告執筆者：上野]

### 3日目 8月12日(火)「現代の北欧」

知識構成型ジグソー法で「深い理解」を目指す

—埼玉県取り組みと神奈川県の高大連携講座が合わさるとき—

#### はじめに

筆者は、「後期近代」の「北欧」というテーマを割り当てられた。神奈川県の高大連携講座の魅力は、何よりも高校と大学のコラボである。大阪大学の古谷大輔先生とやり取りを重ね、良質な情報を得ながら教材を開発することができたことを報告したい。

ところで私たち授業者は、歴史学者の本や講義に触れると、その面白さに感化され、授業に反映しようとするのがしばしばある。しかし、その内容が生徒の理解につながらなかったら、もったいないと思うことだろう。そこで筆者は知識構成型ジグソー法を提案する。

#### 1 「後期近代」とは何か

メールでは、大学の先生からジョック・ヤング『後期近代の眩暈』の紹介を受け、「後期近代」について詳細な分析を賜った。すなわち、『1968年』や1970年代を境に、「包摂型社会」から「排除型社会」へと変化することで、重化学工業から第三次産業へ、量から質を問う社会へ、マイノリティが政治的に声を上げるようになる社会へ、行き詰った福祉国家から新自由主義への変化など、現代社会の質が大きく転換したという見取り図を「後期近代」は描く。そして今日の世界が抱える様々な現代的諸課題(テロリズム、移民問題に端を発する外国人排斥、歪曲された歴史修正主義、新自由主義の台頭)に近代との接続をみる視座として提起された概念であるとの説明を受ける。生徒が抱く「現代史=戦後史=冷戦」という単純な歴史認識を大きく揺さぶり、現代的諸課題を考える視座として有効だと納得した。

#### 2 知識構成型ジグソー法への教材化

「後期近代」という概念的で高度な知識を、どのように生徒に理解させれば良いか。学習科学の知見によれば、教師が「分かりやすい教え方」で講義したとしても、教室のすべての生徒が納得する割合は実際に高くないようである。一時的に覚えることができたとしても、単元が終わると忘れ去られる、というのが、学習科学が明らかにした生徒の実態である。

なぜこのような事態が起こるかという、生徒が経験からつくり上げた考え(素朴概念)がそれほどまでに強固だからである。この素朴概念と授業目標の概念が結びつかないから、生徒の理解に繋がらないのである。三宅なほみは、「学ぶとは概念を変化させること」と捉え、抽象度の高い概念的な知識を習得するには対話的に学ぶことが効果的だと説明する。生徒が資料を読んで認知した知識や既に持っている素朴概念を言葉にしてみ、他者がそれを受け止め、今度はその他者が話し手となるといった発話の往還によって、生徒一人一人によつての「分かり方」で知識が構成されるのである。「後期近代」の例でいえば、生徒は「戦後=冷戦」という素朴概念を中学校やメディアを通して強固に身に付けているため、

教師が「後期近代」の説明をしたとしてもすぐに忘れ去られてしまう。そこで、「戦後＝冷戦」という認識を俎上に上げながら「後期近代」の概念を用いて現代史を捉え直す対話的な学習活動が用意されれば、生徒はこの高度な視座を得られるだろうと考えたのである。

このような「概念変化」を引き起こすことのできる手法として三宅が開発したのが知識構成型ジグソー法である。資料が3つに分かれているからこそ、生徒は「課題に対して全員がそれぞれ違った考えを持っている」ことを直感でき、それゆえ対話に期待感を持って、深い学びに至る対話の往還が生じる（逆に全員同じ資料だと「資料から読み取れることは一様だ」と勘違いし、対話に「答え合わせ」以上の役割を求めなくなる）。そこで筆者は、『戦後は、資本主義 vs 社会主義の冷戦の時代である』という命題に、あなたはどの程度、同意しますか」というメイン課題を考察する知識構成型ジグソー法を開発した。生徒が読む3つの資料は、A「長い20世紀」（木畑洋一）、B「世界の一体化と近代世界システム論」（川北稔）、そしてC「後期近代」であり、いずれも「戦後＝冷戦」という歴史観を揺さぶるものである。

### 3 古谷先生とのコラボ

ところで、はじめのうちは資料Cを別のもので考えていた。しかし、古谷先生に相談したところ、『既存の冷戦構造あるいは既存の政治体制や価値観・文化観などへのアンチ・テーゼ』を掲げた『1968年』関連の資料』を扱うことを提案して頂き、さらにはそれが古谷先生の講義「グretaさんの登場から見るスウェーデン現代史」と結びつけられるとの後押しもあり、教材化に至った。

古谷先生の講義では、「グretaさんのような『個人』の活動が認められるようになった背景には、グローバル資本主義の展開によるスウェーデン政府の新自由主義的な方針転換（財政的に余裕がなくなったために『国家が全体主義的な観点から国民の保護者の立場をあきらめる』かわりに『国家が個人の幸福づくりを支援するだけの存在として後景に退く』こと）」が扱われ、「1968年」やオーロフ・パルメ以来の「自己決定権こそ大事」という精神が引き継がれていることが鮮やかに説明された。3日間に及ぶ講座および知識構成型ジグソー法で「1968年」から現代史を捉え直したこともあって、講義に熱中する生徒の姿が見られた。

[高校：武井寛太（埼玉県立与野高校）、大学：古谷大輔（大阪大学）報告執筆者：武井]

#### 《参考文献》

白水始ら「自治体との連携による協調学習の授業づくりプロジェクト 協調学習 授業デザイン ハンドブック 第3版 —「知識構成型ジグソー法」の授業づくり—」2019年

白水始『対話力』東洋館出版、2020年

西田慎、梅崎透『グローバル・ヒストリーとしての「1968年」』ミネルヴァ書房、2015年